

乳がん 高度検診・治療センター NEW-す NO.21

2016.2

乳がん術後の妊娠



乳がんはほかのがんに比べると若い年齢層に多いのが特徴です。わが国では40～50歳代が乳がんの好発年齢ですが、40歳未満で発症する患者さんも8%くらいの頻度で見られます。もし20歳代、30歳代で乳がんになり抗がん剤治療などを行うと、その後の妊娠・出産が可能かどうか気になることでしょう。

ひと昔前までは、乳がん治療後に妊娠すると再発の危険性を増すと考えられていましたが、今では否定されています。また抗がん剤治療を行った場合の催奇形性（胎児に奇形を起こしやすくする）もあまり根拠がないとされています。

ただ、若い患者さんが抗がん剤治療を受け、月経が止まってしまう可能性はあります。これは抗がん剤が卵巣機能に障害を与えるからです。代表的なものはシクロホスファミド（エンドキサン）ですが、それ以外の抗がん剤でも多かれ少なかれ起こり得ます。また抗がん剤の種類だけでなく、患者さんの年齢によっても異なり、年齢が高くなるほど恒久的な無月経となる可能性が高くなります。

治療終了後無月経とならなければ妊娠が可能です。ただ薬剤の種類にもよりますが、数週間～数か月間、体内に残る薬剤もあるので、念のため、数回の月経を確認してからの妊娠を考えるのが無難でしょう。ホルモン剤であるタモキシフェンは、体外に完全に出てしまうのに約2か月かかるとされるので、投与終了後も2カ月間は妊娠を控えるべきです。

(表1)

抗がん剤治療後に妊娠を希望される患者さんには、卵子や受精卵を凍結保存しておくことも可能（表1）ですが、卵子を凍結すると着床率が低い、独身女性では受精卵の凍結自体が認められていない、など未解決の問題があります。また腹腔鏡を利用した手術で卵巣組織の一部または全部を採取して凍結保存する方法もありますが、国内ではまだ限られた施設においてしか行えません。

当院では、こうしたデリケートな問題に対して、乳腺外科外来のみならず乳がん看護外来でも相談に応じていますので担当医にご相談ください。また、厚生労働省の研究班で作成した患者パンフレットを日本がん・生殖医療研究会のホームページからダウンロードすることもできます。

乳がん治療後の妊娠について、さらに詳しいことをご知りになりたいことがありましたら、乳がん高度検診・治療センターにお問い合わせください。

にんようせい 妊孕性*保持の方法

1. 卵子凍結保存
2. 受精卵（胚）凍結保存
3. 卵巣組織凍結保存

*妊孕性：妊娠できる可能性



市立貝塚病院

TEL : 072-422-5865